

■ ひとまず極端な円安の流れは一服か…

少し振り返ると、ドル/円が2016年12月高値=118.67円の節目を終値で上抜けたのは3月16日のこと。それから僅か8営業日後の28日に、一時125円台乗せの場面を垣間見るほど急速に値上がりする展開となったのは、やはり驚きとしか言いようがない。

まずもって、重要なテクニカルポイントである118.67円を上抜けたことが大きい。

その背景には、年度末に向けた国内輸入勢による実需の買いもあったし、国内輸出勢によるオプションのヘッジを目的としたドル買いもあった。そして、何より日銀による決死の「連続『指し値オペ』実施」が猛烈な円安の進行に大きく加勢した。

とはいえ、今日はもはや年度末の31日。もはや「この時期ならでは」の動きも一巡するし、新年度入り後は新たな資金フローも見られることになるろう。切羽詰まったドル買いや国債先物売りなどの動きが一服すれば、外国為替市場にも新しい風が吹き始める。

また、さすがに政府・当局も“介入ポーズ”を取らざるを得なくなったようで、一昨日あたりから財務省周りや首相官邸周りがヤケに騒々しくなっている。昨日は、昼前あたりから岸田首相と黒田日銀総裁による会談の話題が市場に様々な思惑を生じさせ、朝方123円台にあったドル/円を一気に121円台前半の水準まで下落させた。

そのため、今後しばらくドル/円の上値は押さえられやすくなると見ておいた方が良さそうである。新年度入り後も国債利回りの上昇圧力が強いままの状態であれば、日銀も政策方針の見直しを余儀なくされる可能性があり、そうなれば一旦は大きく円高方向に振れる可能性もあるため、ここは要警戒と言える。

また、足元でユーロ/ドルを買い戻す流れが強まっていることも見逃せない。

エネルギー価格の高騰がドイツなど域内各国のインフレ懸念を煽っていることにより、ここに来てECB理事会メンバーらによるタカ派寄りの発言が相次いで飛び出し始めていることが背景にはある。



結果、左図に見るとおり、ユーロ/ドルは足元で節目の1.1130ドルを上抜ける動きとなってきており、結果的に日足の「転換線」が「基準線」を上抜ける動きも見られている。

さらに、日足の「遅行線」が日々線を下から上に突き抜ける可能性も高まってきており、さし

あたっては日足の「雲」を試すような動きになってもおかしくないと見られる。

結果、対ユーロでドルが弱含みとなってきていることもドル/円の上値を押さえる一因となり得る。やはり、ポイントは123円ちょうどのところ、そこまでの戻りを試す動きとなるかどうかが目先の焦点。その意味でも、当面は122円処を軸とした121-123円のレンジ内での値動きになると想定して、短期の戦略を立てて行きたいと考える。

(03月31日 09:45)